死産の統計的観察

日本医科大学衛生学教室 (主任 八田貞義教授)

川 原 弘 井之川孝雄

Hiroshi Kawahara Takao Inokawa

まえがき

昭和 21 年 9 月 30 日厚生省令第 42 号に依つて死産の届出に関する規程が施行せられた。この法律で「死産」¹⁾²⁾⁴⁾⁶⁾とは妊娠 4 ヶ月以後に於ける死児の出産をいい、死児とは分娩後に於て心臓搏動、随意筋の運動及び呼吸等、他の如何なる生存の徴候をも認めないものをいい、分娩後 7 日以内に医師又は助産婦の死産証書を添えて、死産の発生した場所の市区町村長に届出しなければならない。又妊娠 4 ヶ月以後の人工妊娠中絶をも届出対象とされている。死産は一国の人口問題に重大な影響を及ぼす反面、母性の健康保持の上にも大きな問題を提示している。私達はこの問題にささやかなりとも解明への道を求めて、死産と出生と 4 ヶ月末満の人工妊娠中絶等に就て観察した成績の概要を報告する。

研究材料及び方法

研究材料は東京都に於て昭和 24 年 1 月 1 日より 26 年 12 月 31 日迄に届出られた死産証書 35,779 枚、及び 4 ヶ月末満の人工妊娠中絶の届出表 62,487 枚及び出生 455,763 人、合計 554,029 枚で、これらに就て

2, 3 の統計的観察を行つた。

成 績

a. 年次別死産数

昭和 24 年から 26 年の 3 年間に届出られた自然死産数、及び人工妊娠中絶は第 1 表の如く、自然死産は年と共に減少し、逆に人工妊娠中絶は増加の傾向を辿つてゐることは、我が国の敗戦後の社会相を示すものといえよう。

第 1 表 年次別自然死産及び人工妊娠中絶数

年次	自然死産数	人工妊娠中絶数	計
24	7,454(67.37)	3,611(32.63)	11,065(100.00)
25	7,371(59.69)	4,977(40.31)	12,348(100.00)
26	7,125(57.62)	5,241(42.38)	12,366(100.00)
計	21,950(61.35)	13,829(38.65)	35,779(100.00)

註：() 内は%を示す。

b. 月別死産数

自然死産数と人工妊娠中絶数とを年次別、月別にみると、自然死産に就ては第 2 表の如く 3 年間の平均で

第 2 表 年次別、月別、自然死産数

月別 年次別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	比
24	651	590	708	628	637	617	569	638	608	594	587	627	7,454	100
25	633	582	675	564	583	568	600	610	642	621	617	676	7,371	99
26	698	564	602	578	587	521	617	581	578	607	548	644	7,125	96
計	1,982	1,736	1,985	1,770	1,807	1,706	1,786	1,829	1,828	1,822	1,752	1,947	2,1950	
%	9.03	7.91	9.04	8.06	8.23	7.78	8.14	8.33	8.33	8.30	7.98	8.87	100.00	

は 3 月が最も多く 1,985 名 9.04%、次いで 1 月の 9.03%、12 月の 8.87%、8, 9 月の夫々 8.33%、10 月の 8.30%、5 月の 8.23%、7 月の 8.14%、4 月の 8.06%、11 月の 7.98%、2 月の 7.91% の順で、6 月の 1,706 名 7.78% が最も少ない。

年次別では 24 年では 3 月の 708 名が最も多く、7

月の 569 名が最も少なく、25 年では 12 月の 676 名が最も多く、4 月の 564 名が最も少なく、26 年では 1 月の 698 名が最も多く、6 月の 521 名が最も少ない。年次別、月別に人工妊娠中絶数をみると第 3 表の如く、3 年間の平均では 9 月の 1,383 名 10.00% が最も高く、次いで 8 月の 9.84%、10 月の 9.45%、

第3表 年次別、月別、人工妊娠中絶数

月 年次別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	比
24	193	212	230	252	291	307	314	391	393	414	290	324	3,611	100
25	319	363	461	426	461	359	389	502	492	443	423	339	4,977	138
26	311	445	511	437	430	423	391	468	498	450	429	448	5,241	145
計	823	1,020	1,202	1,115	1,182	1,089	1,094	1,361	1,383	1,307	1,142	1,111	13,829	
%	5.96	7.38	8.69	8.06	8.55	7.87	7.91	9.84	10.00	9.45	8.26	8.03	100.00	

3月の8.79%、5月の8.55%、11月の8.26%、4月の8.06%、12月の8.03%、7月の7.91%、6月の7.87%、2月の7.38%の順で、1月の5.96%が最も低い。年次別では24年は10月の11.46%が最も高く、1月の5.36%が最も低く、25年では8月が最も高く10.09%、1月の6.42%が最も低く、26年では3月の9.75%が最も高く、1月の5.93%が最も低い。従つて人工妊娠中絶ではその性質上1月が最も低いことは従来の日本の習慣及び受胎の時期を考えれば

ばうなづけるが、9月に最も高いのは毎年3、4、5月の受胎が多いことがその原因であらう。然し自然死産は24年を100とすると、25年は99、26年は96と減少しているのに反し、人工妊娠中絶は24年を100として、25年は138、26年は145と増加していて、今日の我国の社会状況を如実に示しているといえよう。

c. 妊娠月数別死産数

妊娠月数別、年次別の自然死産数は第4表の如く、

第4表 妊娠月数別自然死産数

妊娠 月数 年次別	4	5	6	7	8	9	10	不詳	計
24	262	946	1,149	1,060	1,120	848	2,043	26	4,454
25	245	938	1,123	1,130	1,114	833	1,983	5	7,371
26	234	969	1,124	1,113	1,005	724	1,952	4	7,125
計	741	2,853	3,396	3,303	3,239	2,405	5,978	35	21,950
%	3.38	12.99	15.47	15.05	14.76	10.96	27.23	0.16	100.00

3年間の合計では妊娠10ヶ月の5,978名27.23%が最も高く、次いで6ヶ月の15.47%、7月の15.05%、8月の14.76%、5月の12.99%、9月の10.96%の順で、4月の3.38%が最も低い。年次別にみても何れの年次に於ても10月は最も高く、夫々27.41%、26.90%、27.39%で、最も少ないのは各年次と

もに4月で夫々3.51%、3.32%、3.28%と減少していることは重大なことで、妊娠4、5月の流産が一般的に最も多いにかかわらず自然流産では妊娠10月が最も多い所に我々に種々と憶測させる戦後の日本の姿がみられる。

年次別、妊娠月数別の人工妊娠中絶数は第5表の如

第5表 妊娠月数別人工妊娠中絶数

妊娠 月数 年次別	4	5	6	7	8	9	10	不詳	計
24	483	1,153	1,109	429	176	95	150	16	3,611
25	651	1,781	1,623	624	150	63	80	5	4,977
26	619	1,931	1,849	570	162	47	63	0	5,241
計	1,753	4,865	4,581	1,623	488	205	293	21	13,829
%	12.68	35.18	33.13	11.74	3.53	1.48	2.12	0.14	100.00

く、3年間の合計では妊娠5ヶ月が最も多く4,865名35.18%、次いで6ヶ月の33.13%、其他の月数では遙かに減少して4ヶ月の12.68%、7ヶ月の11.74%、8ヶ月の3.53%、10ヶ月の2.12%の順で、9ヶ月の205名1.48%が最も少なく、妊娠月数の不詳のものは21名0.14%である。年次別にみると24、25、26年共に妊娠5ヶ月が最も高く夫々1,153名31.93%、1,781名35.78%、1931名36.84%と増加して、最も少ないのは9ヶ月で、24、25、26年の夫々は150名4.15%、80名1.61%、63名1.20%と減少して、人工的死産であるから当然のこととは云え自然死産と全く趣を異にしている、多賀³⁾の成績に略一致するが、此処でも妊娠8ヶ月以後の人工妊娠中絶が7%以上あることは産科的常識をもつてしても我々に何等かの暗影を投じている。

d. 死産の性比

死産の性比は第6表の如く、3年間の合計では男18,791名52.52%、女は14,549名40.66%、性別の不詳が2,439名6.82%であつて、不詳を除いた性比は100:77である。年次別にみると不詳を除いて男

は53.42%、52.25%、51.98%と稍減少し、女は40.67%、40.28%、41.04%と稍増加の傾向が認められる。

第6表 死産の性比

年次別	性別	男	女	不詳	計	性比
24		5,911 (53.42)	4,500 (40.67)	654 (5.91)	11,065 (100.00)	100:76
25		6,452 (52.25)	4,974 (40.28)	922 (7.47)	12,348 (100.00)	100:77
26		6,428 (51.98)	5,075 (41.04)	863 (6.04)	12,366 (100.00)	100:79
計		18,791	14,549	2,439	35,779	100:77
%		52.52	40.66	6.82	100.00	

註：() 内は%を示す。

e. 身分別死産数

母の身分別の自然死産と人工妊娠中絶とをみると第7表の如く、嫡出、非嫡出の率は昭和24年は78.69%、21.31%、25年は75.97%、24.03%、26年は75.58%、24.42%で嫡出の死産は減少する傾向を示し、非嫡出は逆に増加の傾向を示している。

第7表 身分別死産数

年次別	嫡出			非嫡出			合計	嫡出、非嫡出比	
	自然死産	人工妊娠中絶	計	自然死産	人工妊娠中絶	計		自然死産	人工妊娠中絶
24	5,975 (68.62)	2,732 (31.38)	8,707 (100.00)	1,479 (62.72)	879 (37.28)	2,358 (100.00)	11,065	100:25	100:32
25	5,891 (62.79)	3,490 (37.21)	9,381 (100.00)	1,480 (49.88)	1,487 (50.12)	2,967 (100.00)	12,348	100:25	100:43
26	5,746 (61.48)	3,600 (38.52)	9,346 (100.00)	1,379 (45.66)	1,641 (54.34)	3,020 (100.00)	12,366	100:24	100:46
計	17,612	9,822	27,434	4,338	4,007	8,345	3,5779	100:25	100:41
%	64.19	35.81	100.00	51.98	48.02	100.00			

註：() 内は%を示す。

嫡出の自然死産と人工妊娠中絶との割合は、3年間の合計で自然死産は64.19%、人工妊娠中絶は35.81%で、年次別では自然死産は24、25、26年の夫々が68.62%、62.79%、61.48%と減少し、人工妊娠中絶は逆に31.58%、37.21%、38.52%と増加している。非嫡出では3年間の合計で、自然死産は51.98%、人工妊娠中絶は48.02%を示している、自然死産は24、25、26年夫々が62.72%、49.88%、45.66%と減少し、人工妊娠中絶は逆に37.28%、50.12%、54.34%と増加の一路を辿っていることは現在の日本の社会状況を明瞭に示すものと考えてよからう。

f. 母の年令別死産数

母の年令別に自然死産と人工妊娠中絶とをみると第8表の如く、3年間の合計は25~29歳が最も多く10,386名29.03%、次いで20~24歳の25.25%、30~34歳の20.28%、35~39歳の13.99%、40~44歳の5.51%、15~19歳の5.09%、其他は遙かに少くなり45~49歳の0.68%、14歳以下の0.04%の順で50~54歳の0.02%が最も少なく、年令不詳は40名0.11%である。之を自然死産と人工妊娠中絶別にみると自然死産では25~29歳が最も多く7,059名32.16%をしめ、次いで20~24歳の25.80%、30~34歳の20.22%、35~39歳の12.62%、40~44歳の4.55%、15~19歳の3.85%、45~49歳の0.61%、

表 8 第 母 の 年 令 別 死 産 数

年 令		15以下	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	不 詳	計
24	中絶	3 (0.10)	277 (7.67)	787 (21.79)	852 (23.59)	748 (20.71)	633 (17.53)	277 (7.67)	26 (0.72)	0	8 (0.02)	3,611
	自然	3 (0.03)	265 (3.56)	1,887 (25.31)	2,332 (31.29)	1,490 (19.99)	994 (13.34)	394 (5.31)	61 (0.82)	1 (0.01)	25 (0.34)	7,454
	計	6	442	2,674	3,184	2,238	1,627	673	87	1	33	11,065
25	中絶	4 (0.08)	321 (6.45)	1,241 (24.94)	1,184 (23.88)	1,018 (20.45)	809 (16.25)	346 (7.01)	43 (0.86)	2 (0.04)	2 (0.04)	4,977
	自然	0	322 (4.37)	2,018 (27.38)	2,306 (31.28)	1,439 (19.52)	926 (12.56)	319 (4.33)	36 (0.49)	2 (0.03)	3 (0.04)	7,371
	計	4	643	3,259	3,494	2,457	1,735	668	79	4	5	12,348
26	中絶	3 (0.06)	378 (7.21)	1,342 (25.61)	1,287 (24.56)	1,050 (20.03)	794 (15.15)	345 (6.58)	41 (0.78)	1 (0.02)	0	5,241
	自然	3 (0.03)	258 (3.62)	1,759 (24.69)	2,421 (33.99)	1,510 (21.19)	850 (11.94)	284 (3.99)	37 (0.52)	1 (0.01)	2 (0.02)	7,125
	計	6	636	3,101	3,708	2,560	1,644	629	78	2	2	12,366
合 計	中絶	10 (0.07)	976 (7.06)	3,370 (24.38)	3,327 (24.06)	2,810 (20.36)	2,236 (16.17)	971 (7.02)	110 (0.79)	3 (0.02)	10 (0.07)	13,829
	自然	6 (0.03)	845 (3.85)	5,664 (25.80)	7,059 (32.16)	4,439 (20.22)	2,770 (12.62)	999 (4.55)	134 (0.61)	4 (0.02)	30 (0.14)	21,950
	計	16 (0.04)	1,821 (5.09)	9,034 (25.25)	10,386 (29.03)	7,255 (20.28)	5,006 (13.99)	19,70 (5.51)	244 (0.68)	7 (0.02)	40 (0.11)	35,779

註：（ ）内は%，中絶は人工妊娠中絶，自然は自然死産を示す。

15 歳以下の 0.03% の順で 50~54 歳の 0.02% が最も少なく，不詳は 30 名 0.14% である。人工妊娠中絶では 20~24 歳の 24.38% が最も高く，次いで 25~29 歳の 24.06% 30~34 歳の 20.36%，35~39 歳の 16.17%，15~19 歳の 7.06%，40~44 歳の 7.02%，45~49 歳の 0.79%，14 歳以下の 0.07% の順で 50~54 歳の 0.02% が最も少なく，年令不詳は 10 名 0.07% である。年次別に自然死産をみると各年次ともに 25~29 歳が最も高く夫々 31.29%，31.

28%，33.99% と増加の傾向を示し，最も少ないのは各年次ともに 50~54 歳で夫々 0.01%，0.03%，0.01% である。年次別に人工妊娠中絶をみると 24 年では 25~29 歳の 23.59%，25 年，26 年では 20~24 歳の夫々 24.94%，25.61% が最も高く，最も少ないのは各年次ともに 50~54 歳で夫々 0.04%，0.02% である。

g. 母の身分別，年令別死産数

母の身分別，年令別に死産数をみると第 9 表の如く，

第 9 表 母 の 身 分 別 ， 年 令 別 死 産 数

年 令 別 区 分	15以下	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	不 詳	計
24	嫡 0 (0.25)	182 (2.09)	1,757 (20.18)	2,614 (30.03)	1,962 (22.53)	1,477 (16.97)	629 (7.22)	81 (0.93)	1 (0.01)	4 (0.04)	8,707
	非 (0.25)	360 (15.27)	917 (38.89)	570 (24.18)	276 (11.70)	150 (6.36)	44 (1.87)	6 (0.25)	0	29 (1.23)	2,358
25	嫡 0 (0.13)	173 (1.84)	1,961 (20.90)	2,869 (30.59)	2,130 (22.71)	1,549 (16.51)	614 (6.55)	77 (0.82)	4 (0.04)	4 (0.04)	9,381
	非 (0.13)	470 (15.84)	1,298 (43.76)	625 (21.07)	327 (11.02)	186 (6.27)	54 (1.82)	2 (0.06)	0	1 (0.03)	2,967
26	嫡 0 (0.19)	132 (1.41)	1,819 (19.46)	3,060 (32.75)	2,217 (23.72)	1,468 (15.71)	573 (6.13)	74 (0.79)	2 (0.02)	1 (0.01)	9,346
	非 (0.19)	504 (16.69)	1,282 (42.46)	648 (21.47)	343 (11.36)	176 (5.83)	56 (1.85)	4 (0.12)	0	1 (0.03)	3,020
計	嫡 0 (0.19)	487 (1.78)	5,537 (20.18)	8,543 (31.15)	6,309 (22.99)	4,494 (16.38)	1,816 (6.62)	232 (0.85)	7 (0.02)	9 (0.03)	27,434
	非 (0.19)	1,334 (15.99)	3,497 (41.91)	18,43 (22.09)	946 (11.34)	512 (6.14)	154 (1.85)	12 (0.12)	0	31 (0.37)	8,345
合 計	16	1,821	9,034	10,386	7,255	5,006	1,970	244	7	40	35,779

註：（ ）内は%，嫡は嫡出，非は非嫡出を示す。

第1図 母の身分別、年齢別死産

3年間の合計では第1図の如く、嫡出では母の年齢の25~29歳が最も多く31.15%、次いで30~34歳の22.99%、20~24歳の20.18%、35~39歳の16.38%、其他の年齢では著しく少なく、40~44歳の6.62%、15~19才の1.78%、45~49才の0.85%の順で50~54才の0.02%が最も少なく、年齢不詳は0.03%である。非嫡出では20~24才の41.91%が最も高く、次いで25~29才の22.09%、15~19才の15.99%、30~34才の11.34%、35~39才の6.14%、40~44才の1.85%、15才以下の0.14%の順で45~49才の0.12%が最も少なく、年齢不詳は0.37%である。年次別にみても各年次とも上述の結果と略同様である。従つて死産は嫡出では25~29才に、非嫡出では20~24才に夫々最も高く、非嫡出の年齢が嫡出の年齢に比較して5才少ないということは現在の日本の社会状況を如実に示すものと云えよう。

h. 出産順位別死産数

自然死産と人工妊娠中絶別に出産順位別にみると第

第10表 出産順位別死産数

年次	24			25			26			合 計		
区分	中	自	計	中	自	計	中	自	計	中	自	計
出産数												
1	1,150	2,803	3,953	1,717	2,906	4,623	1,932	2,603	4,535	4,799 (34.70)	8,312 (37.87)	13,111 (36.64)
2	515	1,584	2,099	739	1,576	2,315	809	1,613	2,422	2,063 (14.92)	4,773 (21.74)	6,836 (19.11)
3	490	1,025	1,515	654	1,018	1,672	671	1,072	1,743	1,815 (13.12)	3,115 (14.19)	4,930 (13.78)
4	445	691	1,136	519	691	1,210	577	703	1,280	1,541 (11.14)	2,085 (9.49)	3,626 (10.13)
5	322	495	817	443	446	889	415	468	883	1,180 (8.53)	1,409 (6.42)	2,589 (7.24)
6	270	323	593	336	290	626	340	282	622	946 (6.84)	895 (4.08)	1,841 (5.15)
7	164	208	372	248	177	425	220	159	379	632 (4.57)	544 (2.48)	1,176 (3.29)
8	108	126	234	143	108	251	128	96	224	379 (2.74)	330 (1.50)	709 (1.98)
9	77	86	163	89	65	154	177	63	140	243 (1.76)	214 (0.97)	457 (1.28)
10	30	45	75	48	37	85	44	33	77	122 (0.88)	115 (0.52)	237 (0.66)
11	18	32	50	20	21	41	16	9	25	54 (0.38)	62 (0.28)	116 (0.32)
12	9	14	23	6	11	17	7	6	13	22 (0.16)	31 (0.14)	53 (0.15)
13	3	8	11	5	4	9	2	3	5	10 (0.07)	15 (0.08)	25 (0.07)
14	1	2	3	1	2	3	2	1	3	4 (0.04)	5 (0.03)	9 (0.02)
15	2	0	2	1	0	1	1	0	1	4 (0.04)	0	4 (0.01)
不 詳	7	12	19	8	19	27	0	14	14	15 (0.11)	45 (0.21)	60 (0.17)
計	3,611	7,454	1,1065	4,977	7,371	12,348	5,241	7,125	12,366	13,829	21,950	35,779

註：() 内は%，中は人工妊娠中絶，自は自然死産を示す。

10 表の如く、3 年間の合計では第 1 子が最も多く、13,111 名 36.64%，次いで第 2 子の 19.11%，第 3 子の 13.78%，第 4 子の 10.13%，第 5 子の 7.24%，第 6 子の 5.15%，第 7 子の 3.29%，第 8 子の 1.98%，第 9 子の 1.28%，第 10 子以後は 1% 以下になり、第 10 子は 0.66%，第 11 子は 0.32%，第 12 子は 0.15%，第 13 子は 0.07%，第 14 子の 0.02% の順で第 15 子の 0.01% が最も少なく、出産順位別の不

詳なものは 60 名 0.17% である。これを自然死産及び人工妊娠中絶からみても全く同様の傾向がみられる。

i. 施設内外別死産数

施設内外別の死産数をみると第 11 表の如く、施設内での死産数は年と共に増加し、逆に施設外の死産は年と共に減少している。然も施設内では病院よりも医院の方に増加が著しく、助産所では 2% と略一定の値

第 11 表 施設内外の死産数

区 分 年 次 別	施 設 内				施 設 外			合 計
	病 院	医 院	助 産 所	計	自 宅	其 他	計	
24	3,916 (35.39)	2,042 (18.45)	223 (2.02)	6,181 (55.86)	4,611 (41.67)	273 (2.47)	4,884 (44.14)	11,065 (100.00)
25	4,144 (33.56)	3,687 (29.86)	286 (2.32)	8,117 (65.74)	4,052 (32.82)	179 (1.44)	4,231 (34.26)	12,348 (100.00)
26	4,189 (33.88)	4,179 (33.79)	250 (2.02)	8,618 (69.69)	3,596 (29.08)	152 (1.23)	3,748 (30.31)	12,366 (100.00)
計	12,249 (34.24)	9,908 (27.69)	759 (2.12)	22,916 (64.05)	12,259 (34.26)	604 (1.69)	12,863 (35.95)	35,779 (100.00)

註：() 内は%を示す。

を示している。施設外では自宅及びその他の何れに於ても年々減少している。3 年間の平均では施設内が 64.05%，施設外は 35.95% である。

j. 立会人別死産数

死産の立会人別にみると第 12 表の如く、医師の方は年々増加していて 3 年間の平均は 75.44%，助産婦は逆に減少していて 3 年間の平均は 24.43%，其他も年々減少して 3 年間の平均では僅か 0.13% にすぎない。然し助産婦は法によつて指定の医師がない場合は助産所としての使用が出来ないので、立会人も一応は優先的に医師の名で届出される現状で、助産婦の数は恐らく届出数字の何倍かになり、従つて医師の方は何割かが減少すると考えられる。

第 12 表 立会人別死産数

区 分 年 次 別	医 師	助 産 婦	其 他	計
24	7,820 (70.67)	3,223 (29.13)	22 (0.26)	11,065 (100.00)
25	9,470 (76.69)	2,867 (23.22)	11 (0.09)	12,348 (100.00)
26	9,703 (78.47)	2,651 (21.44)	12 (0.09)	12,366 (100.00)
計	26,993 (75.44)	8,741 (24.43)	45 (0.13)	35,779 (100.00)

註：() 内は%を示す。

k. 死産の原因

死産の原因に就ては多数の業績があるが、私達の成績は次の如くである。

1) 自然死産

自然死産の原因に就てみると第 13 表の如く、3 年間の合計では母体側の原因は 8,441 名で総数の 38.45% に当り、胎児側の原因では 8,076 名で総数の 36.80% で、原因不詳のものが 5,433 名 24.75% で最も少ない。これを病患別にみると母体側の原因では外力及び外来刺戟が最も多く 12.55%，次いで妊娠中毒症の 9.26%，結核及び梅毒を含む慢性全身性疾患の 6.82%，性器異常の 3.29%，分娩時の異常の 3.09%，急性全身性疾患の 2.10%，其他の 1.33% の順で、精神病的 0.01% が最も少ない。胎児側では卵膜及び破水の異常が最も多く 7.56%，次いで成熟異常の 5.86%，臍帯異常の 5.05%，其他の 4.91%，羊水の異常が 3.99%，胎位異常が 2.87%，胎盤の異常の 2.54%，胎児の發育異常が 2.26%，胎勢異常の 0.82%，多胎妊娠が 0.68% の順で、廻旋異常の 0.26% が最も少ない。原因不詳は 5,433 名 24.75% である。

2) 人工妊娠中絶

人工妊娠中絶を行つたものの原因に就ては第 14 表の如く、3 年間の合計で母体側の原因は 9,321 名 67.38% をしめていて、胎児では 565 名 4.11%，医学的理由によらないものは 2,707 名 19.57%，原因の不詳は 1,236 名 8.94% である。母体側で最も多いものは慢性全身性疾患の 5,194 名 37.56%，次いで

第13表 死産の原因(自然死産)

年次		(24)	(25)	(26)	計	%	
区 分							
母 体 側 の 異 常	慢性全身性疾患	880	296	320	1,496	6.82	8,441 名 38.45%
	外力及び外来刺戟	853	912	989	2,754	12.55	
	妊 娠 中 毒 症	693	683	656	2,032	9.26	
	性 器 異 常 疾 患	221	335	168	724	3.29	
	分 娩 時 の 異 常	195	183	301	679	3.09	
	急性全身性疾患	156	161	144	461	2.10	
	精 神 病	3	0	0	3	0.01	
	其 他	91	103	98	292	1.33	
胎 児 側 の 異 常	成 熟 異 常	538	571	177	1,286	5.86	8,076 名 36.80%
	臍 帯 の 異 常	420	361	327	1,108	5.05	
	卵膜及び破水の異常	404	667	588	1,659	7.56	
	胎 位 異 常	283	247	100	630	2.87	
	羊 水 の 異 常	253	319	304	876	3.99	
	胎児の発育異常	179	191	126	496	2.26	
	胎 盤 の 異 常	150	198	209	557	2.54	
	胎 勢 異 常	45	56	78	179	0.82	
	多 胎 妊 娠	32	33	84	149	0.68	
	廻 旋 異 常	12	17	30	59	0.26	
	其 他	426	310	341	1,077	4.91	
	不 詳	1,620	1,728	2,085	5,433	24.75	
	計	7,454	7,371	7,125	21,950	100.00	

第14表 死産の原因(人工妊娠中絶)

年 次		(24)	(25)	(26)	計	%	
区 分							
母 体 側 の 異 常	慢性全身性疾患	1,919	1,645	1,630	5,194	37.56	9,321 名 67.38%
	妊 娠 中 毒 症	436	1,134	1,382	2,952	21.35	
	性 器 異 常 疾 患	74	58	20	152	1.09	
	急性全身性疾患	57	46	18	121	0.87	
	外力及び外来性刺戟	43	6	7	56	0.40	
	分 娩 時 の 異 常	18	6	4	28	0.20	
	其 の 他	4	45	507	556	4.02	
	精 神 病	41	193	28	262	1.89	

胎 児 側 の 異 常	胎 盤 の 異 常	45	57	63	165	1.19	565 名 4.11%
	成 熟 異 常	25	12	20	57	0.41	
	臍 帯 異 常	19	4	4	27	0.19	
	羊 水 の 異 常	15	31	47	93	0.67	
	多 胎 妊 娠	8	2	0	10	0.11	
	卵膜及び破水の異常	8	13	20	41	0.29	
	胎 位 異 常	8	8	0	16	0.12	
	胎 児 の 畸 形 及 び 発 育 異 常	8	24	4	36	0.26	
	其 他	88	8	24	120	0.87	
	医 学 的 理 由 によらないもの	17	1,382	1,308	2,707	19.57	
	不 詳	778	303	155	1,236	8.94	
	計	3,611	4,977	5,241	13,829	100.00	

妊娠中毒症の 21.35%，其他の 4.02%，精神病の 1.89%，性器異常の 1.09%，急性全身性疾患の 0.87%，外力及び外来刺戟の 0.40%，分娩時の異常が最も少なく 0.20% である。

胎児側では最も多いのが胎盤の異常の 1.19%，其他の 0.87%，羊水異常の 0.67%，成熟異常の 0.41%，卵膜及び破水の異常が 0.29%，胎児の畸形及び發育異常が 0.26%，臍帯異常が 0.19%，胎位異常が 0.12% の順で多胎妊娠の 0.11% が最も少い。

1. 4 ヶ月未満の人工妊娠中絶数

4 ヶ月未満の人工妊娠中絶数の届出されたものは第 15 表の如く、3 年間の合計では法 12 条が 26,507 件、法 13 条が 35,980 件で合計 62,487 件であつて、24 年は 8,091 件が 25 年では 3 倍以上の 28,888 件とな

り、26 年は少しく減少して 25,508 件で合計 62,487 件である。

第 15 表 4 ヶ月未満の人工妊娠中絶数

区分	年次別			
	24	25	26	計
法 12 条	4,449	10,033	12,025	26,507
法 13 条	3,642	18,855	13,483	35,980
計	8,091	28,888	25,508	62,487

m. 出生と死産との比較

3 年間の出生数と死産数とを比較すると、出生数は第 16 表の如くである。従つて死産率は 24 年の 6.46，25 年の 8.34，26 年は 9.07 と上昇の一路を辿つてゐる。

第 16 表 年次別、性別、嫡出、非嫡出別出生数

区分 年次別	男			女			合 計	嫡 出 計	非嫡出計
	嫡	非	計	嫡	非	計			
24	84,763	2,922	87,685	80,860	2,841	83,701	171,386	165,623 (96.64)	5,763 (3.36)
25	73,806	2,736	76,542	68,899	2,657	71,556	148,098	142,705 (96.36)	5,393 (3.64)
26	67,336	2,574	69,910	63,868	2,501	66,369	136,279	131,204 (96.28)	5,075 (3.72)
計	225,905	8,232	234,137	213,627	7,999	221,626	455,763	439,532	16,231
%	96.48	3.52	100.00	96.39	3.61	100.00		96.44	3.56

註：() 内は%を示す。

次に嫡出、非嫡出別に死産率をみると第 17 表の如く、死産率 3 年間の平均では嫡出が 6.24% にすぎな

いものが、非嫡出では 8.23 倍の 51.41% を示す。これを年次別にみると、24 年では嫡出の死産率は 5.26%，非嫡出の夫は 7.78 倍の 40.92%，25 年では

第 17 表 嫡出、非嫡出別の出生及び死産数

年次別	出生嫡出数	死産嫡出数	死産率	出生非嫡出数	死産非嫡出数	死産率
24	165,623	8,707	$\frac{(100)}{5.26}$	5,763	2,358	$\frac{(100)}{40.92}$
25	142,705	9,381	$\frac{(125)}{6.57}$	5,393	2,967	$\frac{(134)}{55.02}$
26	131,204	9,346	$\frac{(135)}{7.12}$	5,075	3,020	$\frac{(145)}{59.51}$
計	439,532	27,434	6.24	16,231	8,345	51.41

嫡出は 6.57%, 非嫡出の夫は 8.37 倍の 55.02%, 26 年では嫡出は 7.12%, 非嫡出の夫は 8.36 倍の 50.51% となつてゐる。従つて何れにしても死産率は年と共に上昇の一路を辿り特に非嫡出に死産率が高く、嫡出の 8 倍以上を示し、嫡出は 24 年を 100 とすると、25 年は 125, 26 年は 135 と増加し、非嫡出では 24 年を 100 とすると 25 年は 134, 26 年は 145 とやはり増加の一路を辿つていて、非嫡出にかく高い死産率を示すことは母性保護上重大な関心事であるとともに、公式な死産届によるもののみでもかくの如くであることを考慮に入れると、敗戦後の社会世相を充分に我々に実例で示していると考えられる。

総括及び結論

東京都に於て昭和 24, 25, 26 年の 3 年間に於ける死産届, 出生届合計 554,029 件を観察した成績は次の通りである。

- 1) 年次別では自然死産は減少, 人工妊娠中絶は増加の傾向を示していて, 自然死産は 21,950 件, 人工妊娠中絶は 13,829 件で, その比は 100 : 63 である。
- 2) 月別にみると自然死産は 3 月に最も多く, 6 月に最も少ない, 年次別では 24 年を 100 とすれば 25 年は 99, 26 年は 96 と減少の傾向がある。人工妊娠中絶は 9 月に最も多く, 1 月に最も少なく, 24 年を 100 とすると 25 年は 138, 26 年は 145 を示し, 自然死産と全く逆に増加の一途を辿つてゐる。
- 3) 妊娠月数別の死産をみると, 自然死産では妊娠 10 月が最も多く 27.23%, 妊娠 4 ヶ月が最も少なく 3.38% である。人工妊娠中絶では妊娠 5 ヶ月の 35.18% が最も多く, 9 ヶ月の 1.48% が最も少なく, 自然死産と趣を異にしている。
- 4) 死産の性比に就いては 6~7% の不詳を除けば, 男女の比は昭和 24 年が 100 : 76, 25 年は 100 : 77, 26 年は 100 : 79 と女が年々多くなる傾向を示している。
- 5) 母の身分別に嫡出と非嫡出との比をみると, 自然死産は 24 年は 100 : 25, 25 年は 100 : 25, 26 年は

100 : 24 と略一定しているが, 人工妊娠中絶では 24 年が 100 : 32, 25 年は 100 : 43, 26 年は 100 : 46 と増加している。

6) 母の年齢別にみると自然死産では 25~29 才が最も高く 32.16% をしめ, 50~54 才の 0.02% が最も低い。人工妊娠中絶では 20~24 才の 24.30% が最も高く, 50~54 才の 0.02% が最も低い。

7) 母の身分別の死産をみると, 嫡出では 25~29 才が最も高く 31.15% をしめ, 50~54 才の 0.02% が最も低く, 非嫡出では 20~24 才の 41.91% が最も高く, 45~49 才の 0.12% が最も低い。25 才未満を比較すると, 嫡出では 21.96%, 非嫡出では 2.65 倍以上の 58.09% を示しているのは日本の姿であろう。

8) 出産順位別の死産数をみると第 1 子が最も多く 36.64% をしめ, 以後は遙かに少なくなり 2 子の 19.11%, 3 子の 13.78%, 4 子の 10.13%, 5 子の 7.24%, 6 子の 5.15%, 7 子の 3.29%, 8 子の 1.98%, 9 子の 1.28% の順で, 10 子以後は 1% 以下である。自然死産及び人工妊娠中絶の何れに於ても全く同様の傾向を示している。

9) 施設内外別の死産数をみると年と共に施設内が増加し, 24 年の 55.86% が 26 年では 69.69% となつていて, 逆に施設外では 24 年は 44.14% のものが 26 年では 30.31% と減少している。

10) 立会人別に死産数をみると, 医師の方は 24 年の 70.67% が, 26 年では 78.47% と増加し, 助産婦の方は逆に減少し, 24 年の 29.13% が 26 年では 21.44% となつてゐる。

11) 原因からみると自然死産は母体側が 38.45%, 胎児側が 36.80%, 原因不詳が 24.75% で, 母体側では外力及び外来刺激が最も多く 12.55%, 次に妊娠中毒症の 9.26%, 梅毒, 結核を含む慢性全身性疾患が 6.82% 等で, 胎児側では卵膜及び破水の異常が最も多く 7.56%, 次いで成熟異常の 5.86%, 臍帯異常の 5.05% 等である。人工妊娠中絶では母体側の原因

67.38% をしめ、胎児側は 4.11%、医学的理由によらないものが 19.57%、原因不詳が 8.94% であつて、母体側の主なものは結核、梅毒を含む慢性全身性疾患が最も多く 37.56%、次いで妊娠中毒症の 21.35% 等で、胎児側で最も多いのは胎盤の異常の 1.19% である。

12) 4 ヶ月未満の人工妊娠中絶では、24 年が 8,091 件、25 年は 28,888 件、26 年は 25,508 件で 3 年間では 62,487 件である。

13) 死産を出生と比較してみると死産率は 24 年が 6.46%、25 年が 8.34%、26 年は 9.07% と増加し、更にこれを嫡出、非嫡出に分けて死産率をみると、嫡出は 24 年が 5.26%、25 年が 6.57%、26 年は 7.12% と増加し、非嫡出は更に多く 24 年は 40.92%、25 年は 55.02%、26 年が 59.51% と著しい増加ぶり

を示して、嫡出では 24 年を 100 とすると、25 年は 125、26 年は 135 であるが、非嫡出では 24 年を 100 とすると、25 年は 134、26 年は 145 となつて、我が国の社会相を如実に示すものと云えよう。

稿を終るに臨み塩田学長先生に心から敬意を表し、御指導、御校閲を頂いた恩師八田貞義教授に満腔の謝意を表し、資料を快よく提供下さり種々御協力をいただいた東京都衛生局総務部普及課長山本貞雄、班長柳沼安雄の両氏以下職員名位に深謝する。

参 考 文 献

- 1) 厚生省編：新しい母子衛生，医学書院（昭 26）
- 2) 赤須文男：流早産，日本医書（昭 22）
- 3) 多賀ミチ：日医大誌，19，9（昭 27）
- 4) 館 稔：人口統計，日本医書（昭 27）
- 5) 古屋芳雄：医用統計法，金原商店（昭 22）
- 6) 川上理一：衛生統計の実際，公衆衛生社（昭 24）

学童の結核検診に於ける旧ツ 100 倍稀釈液による皮内反応の意義と間接撮影の評価について

日本医科大学小児科学教室（主任 村上教授）
大井第一小学校校医

大 村 久 雄
Hisao Ōmura

緒 言

大井第一小学校全児童の昭和 28 年度の結核検診に際して、全児童に旧 ツベルクリン 2,000 倍稀釈液（2000 X）と 100 倍稀釈液（100 X）を同時に用いてツベルクリン皮内反応（ツ反応）を行い、両者の反応の差異を検し、なお、X 線診断に於ける 35 mm、6×6 cm の間接撮影と直接撮影及び透視による所見の比較を行つたので、それらの結果を報告する。

検査人員と方法

1. 全学童 1,389 名（受診率 99%）について、昭和 28 年 5 月 10 日から同年 7 月 15 日の間に行つた。
2. ツ反応 予研から特に分与を受けた標準 2000 X 及び 100 X の 2 通りの旧ツ液をそれぞれ左、右の前膊屈側部に同時に型の通りに 0.1 cc を正確に皮内注射し、48 時間後に判定した。100 X によるツ反応の

判定は室橋¹⁾、重松^{2),3)}、沢田⁴⁾等に従つて 2000 X 同様発赤 10 mm 以上を陽性とした。

なお、施行後全身反応（発熱等）を伴つたものが 7 名（0.5%）あつたが、いずれも一過性であつた⁵⁾。

3. X 線撮影は、まず全員に 35 mm 間接撮影を行い、その中から病変のあるもの、疑のあるもの及び撮影不良のもの計 69 名を選んで 6×6 cm 間接撮影を行い、更に直接撮影及び透視を行つて結核性病変を診断した。それぞれの撮影の間は概ね 1 カ月であつた。なお、35 mm のフィルムを枠に入れてエプスコープとして父兄に供覧した。

4. 赤沈は病変を認めた例について検し、一般診察は全員に行つた。

検 査 成 績

I ツ 反 応